



備荒草木圖

乾

植

78
3432
19



78
3432

天保癸巳嘉平月新鑄

齊民必用

備荒草木圖

天真樓藏

早稻田大學圖書館
第31.1.16號
藏書

備荒草木圖序

茲歲運氣失序。秋霜早降。風雨惡作。東北曠寒之國。年穀不登。民有菜色。由此各國迭禁糴糶。漕運四絕。都下米價一時湧騰。斗米幾直二千錢。或曰。輿羽二州最耗。至其甚。則犬馬斃于野。餓莩僵于塗者。徃隨處而有焉。予曰。惡是何言之無理也。古人云。國無三年之儲。則非其國。今昇平

備荒草木圖

石坂序

天真樓藏

殆三百年。國家殷富。民物充牣。政教之所
至。預防之所及。儲畜之贍。不啻常平義倉。
類也。苟使賤丈夫。不當塗。則一秋之不登。
豈遽至於人犬共斃乎。蓋必有以矣。時杉
氏立卿適在坐。乃出書一帙。曰。其然。豈其
然。式頃聞東陲北邊之氓。久不能粒食。田
隴荒蕪。農畝懸罄。老壯逃徙。騷然民不安。
其居。或剝草根。剥木皮。而食之。且饑餒之。

急不暇辨。其良毒忌宜。爭喫競啖。依此罹
不測之疾病。困斃苦死者。亦夥矣。我深悼
之。曰。刻此書。欲以公之世。此書原是奧州
一關醫臣建部清菴所編。而予亡兄士業
曾勘校。以久藏于篋底矣。蓋其為書也。圖
草木良平無毒。而可療飢者。一百餘品。形
狀。且以國字概書。其稱呼俗言。及食法等。
於傍。方今之時。而為見救預防之一助。豈

可謂無少補乎。故吾今再校之。欲以上
 稗請序一言。予聞此始信世人之言不復
 虛然而猶恠其國無一年之儲畜。使人民
 飢餒已至於此。嗚呼。又何三年之儲之云
 乎。抑此書已為見救預防之助。則是救
 急不可緩之要。豈敢求兄長無用之序文
 耶。適其刻之立卿嘿而去矣。後數日刻已
 成。復來丐其序。予不能固辭。遂以前言弁

卷首噫立卿之於此舉實老成憂國婆心
 也。夫天保四年歲次癸巳仲冬日
 東都侍醫法眼竒齋石阪宗摺撰



門人 華山南啟期謹書



備養堂本圖

石坂序

三

作辭草水圖 卷之一
收鑄鼎象物使民知螭魅罔兩之狀而
莫之或逢今也聖神之作業雖非可敢
比擬然至於圖物誘民之為則亦不可
謂之非倫也抑先考之草此書余方髫
鬢在膝下童心昧昧猶能有記其拮据
之勤也不幸事未就緒而先考逝矣家
兄亮策君之嚴纂表亦有志繼述無柰
東輿之僻咨詢無人考徵乏書也既而

余來江都冒於杉田氏君乃使余代任
其事余於是參考羣籍質問諸家卒能
訂定和漢名稱更請交游中善繪事者
改寫其稍失真者分為上下二卷將以
謀諸梨棗也願先考之志特在救鄉國
一隅之急而今乃推以及之於海內救
民之吏或有取于此以備荒政之一助
焉則余兄弟區區繼述之微衷庶幾不

負於先考之靈矣夫。

文化乙丑秋八月

若狹侍醫

杉田勤謹識

天保癸巳小寒前一日

甲斐 牧野城書

余未嘗不謂此書之有益於世也。然其間亦有未盡之處。余亦未嘗不謂此書之有益於世也。然其間亦有未盡之處。余亦未嘗不謂此書之有益於世也。然其間亦有未盡之處。

備荒草木圖緣起

余が弱きオレあろ。父玄澤かワカくくけらく。こが故郷のスサド陸奥ミチノクに在り時の師建部清菴翁ベセイヤシノヲダケノスシ醫の道ミチより深くミるる。河原カハより。元禄寶曆ゲンロクホウレキの奥の國オクノクニに飢饉イヒシユエせるときの事状アリスサマを見聞ミキキたよびて。悔クハのくいウヒさヒさヒをヒひて。今イマより後ノチをヒ然シカるハ災ヒれヒおヒこヒまヒらヒむヒとヒ記キ民の食クひキてキ生イくキ危キきキ木ク草サをキどキをキ擇エびキてキくキくキ教ウへキらキるキ。民間ミンケン備荒録ビウカルクといイはハるハ書シヤをシヤ著シヤさシヤれシヤらシヤるシヤをシヤ祖オホ父ナ玄ゲン梁リヤウ翁ウもウ與アツカりアツカてアツカ刻スリ板カキとスリせスリせスリ

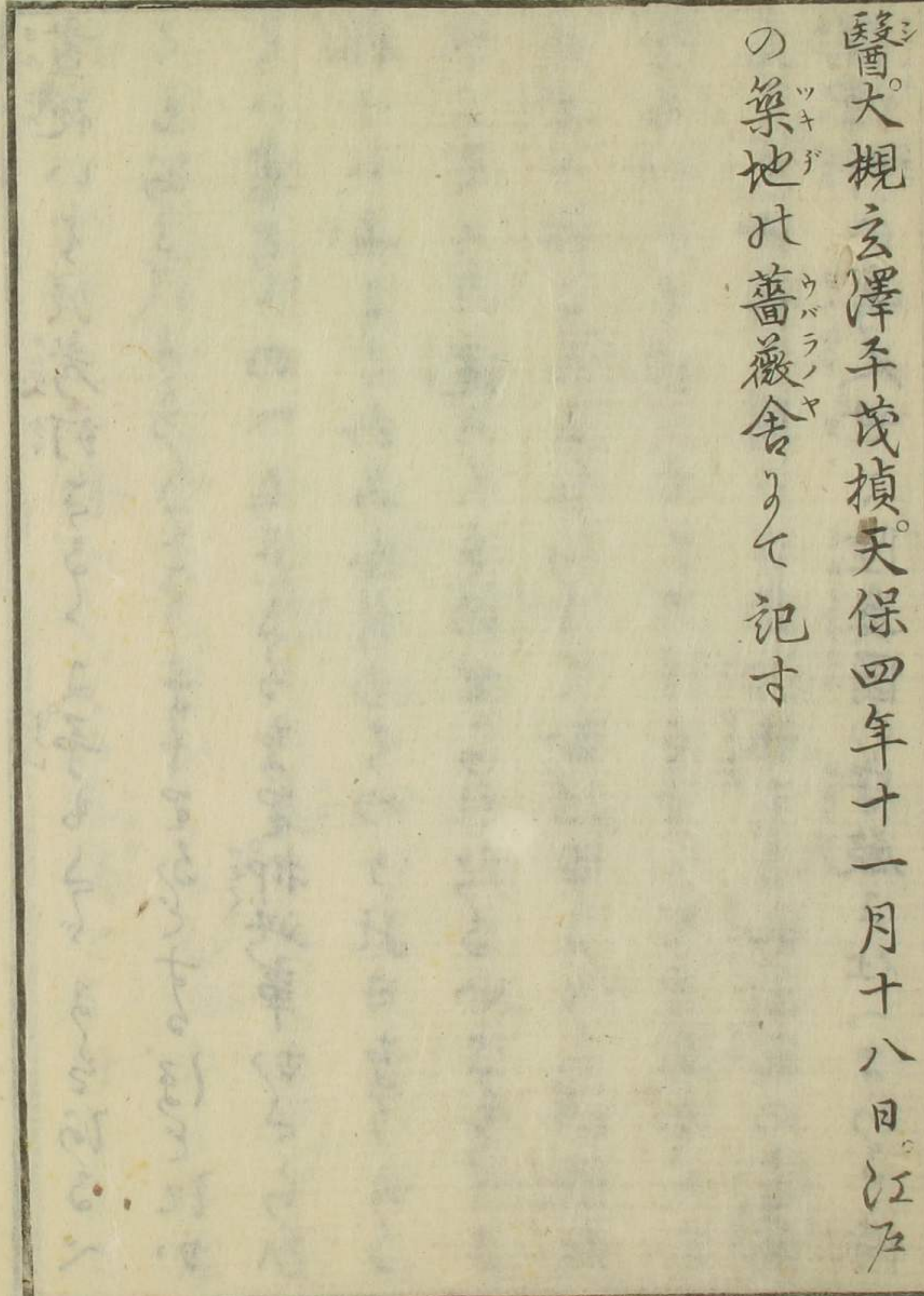
て。世に弘めらるる。のくして又その草木の形状を
 真寫して。備前草木圖と題づけ。草稿せられと
 里々る紙。二男元伯主の故の杉田玄白先生の嗣
 子となりて。ありける。授て。かゝるよく。質正して
 ちのうひて。と。あつらへらるるを。たの色も
 よもく。ハかむ。グハガ。さきとありて。あり。は。を。
 こと。ひに。さ。あ。事。も。より。は。ひ。な
 ど。か。さ。ま。き。然るに。志。語。り。父。を。う。せ。て。後。た
 や。七。と。せ。と。い。ふ。この。夏。と。元。伯。ぬ。も。身。お。の。ら

きぬ。然るに。秋。半。より。東北。北。國。の。中。に
 是。時。志。ぬ。寒。氣。の。お。こ。ハ。と。五。穀。登。ら。ば。民
 くの。患。難。い。ふ。な。り。な。り。と。ぞ。さ。る。よ。あ。ハ。せ
 て。此。ら。ち。と。な。り。て。あ。の。備。前。録。を。と。免。見。る。人
 の。少。の。と。び。と。聞。く。ま。ぞ。建。部。箱。の。遠。き。慮。れ。厚。ま
 心。ざ。し。を。ま。い。さ。ら。に。尊。く。有。ぐ。さ。く。ね。も。ひ。志。を
 ぬ。る。故。元。伯。主。此。弟。と。な。り。て。家。門。に。こ。せ。る。杉。田
 玄。卿。君。が。り。こ。と。さ。ら。よ。さ。み。ら。ひ。て。志。う。く。な。む
 き。つ。の。の。草。木。圖。と。い。う。な。ら。む。速。に。板。本。を

てもものゝ多まりに。さとのひあらむをのをとい
ふよ其いたの色さうき頃。兄が命するまゝに。小
野蘭山翁のをもとにめて行くひこ。さる道をま
あびぐて。鑑定をうけし事ありき。指をさす。
今三十一年ありの昔ありたり。とねりひむら
るゝむこの里あるを。汝の志う心づきてそのの
さるゝえ。やぐてかの前へ。れ翁さち。まこ兄がそ
ろなる。いいでやとて。まふさち元伯ぬ。れ家
嗣せる。白玄主は傳へる。その草稿をうけとりて

晝夜いそげ考訂さるゝ。又予もさるゝをあるべ
くもあはれ。さうとさうまどまどするほどにか
くハ書そののへらさるるを。抑此事か。らひ
始し。去りかみお目のちつ。れ日ありたり
に。のどろり速くをのせられたる。いさをさ
の余が心もこのひありておぼゆる。ら。縁起
をもいとまほしくて。さるゝまどしてなむ。かくい
ふ。まを御君と同トさ。ぬに奉むる。和蘭國の書籍
翻譯所の寄人せ。陸奥國の守殿は仕へまつる侍

醫。大槻玄澤平茂損。天保四年十一月十八日。江戸
の築地此薔薇舎りて記す



備荒草本圖附言

一此書ハ奥州一関連部清菴翁の編輯よりて。因
阿る亡呪が典王校するところあり。夫天の
萬物成生ずる各々用ふる所あり。其阿るが中
より人に益阿るもの草木は勝るハ世々子
木の中は於て五穀小勝もるハ無一も一五穀
登らざれば人民饑餓を其登らざる事ハ急
時依の夏に因り旱風壇の害小遭ふが故
至然るは此災古今無き事阿るハ故に五穀

の外食料（外食料）小充（小充）食（食）草（草）本（本）紙（紙）抄（抄）び（び）と（と）孫（孫）て（て）養（養）家（家）の
用（用）は（は）備（備）へ（へ）む（む）と（と）阿（阿）る（る）べ（べ）ら（ら）ば（ば）こ（こ）色（色）翁（翁）の（の）仁（仁）御（御）孔（孔）
目（目）ん（ん）み（み）一（一）と（と）今（今）予（予）が（が）再（再）校（校）し（し）梓（梓）小（小）上（上）せ（せ）て（て）以（以）
て（て）此（此）兄（兄）が（が）指（指）志（志）紙（紙）継（継）ぐ（ぐ）所（所）い（い）あり（あり）。

一書中載（書中載）する（する）ところ（ところ）の（の）草（草）本（本）法（法）の（の）如（如）く（く）製（製）し（し）調（調）食（食）
さ（さ）る（る）と（と）紙（紙）を（を）膏（膏）て（て）害（害）ある（ある）こと（こと）と（と）あ（あ）く（く）飢（飢）紙（紙）凌（凌）ぎ（ぎ）命（命）
紙（紙）保（保）し（し）是（是）る（る）もの（もの）な（な）り（り）荒（荒）歲（歲）も（も）飢（飢）民（民）漫（漫）小（小）有（有）毒（毒）
の（の）草（草）本（本）を（を）採（採）食（食）ひ（ひ）か（か）へ（へ）里（里）て（て）害（害）紙（紙）指（指）き（き）命（命）紙（紙）失（失）ふ（ふ）
小（小）多（多）る（る）者（者）あり（あり）と（と）く（く）採（採）ば（ば）む（む）と（と）阿（阿）る（る）危（危）ら（ら）ば（ば）。

一草（草）本（本）小（小）受（受）名（名）の（の）有（有）る（る）もの（もの）は（は）奉（奉）名（名）の（の）左（左）旁（旁）小（小）記（記）を（を）。
然（然）と（と）も（も）諸（諸）國（國）の（の）方（方）言（言）大（大）と（と）く（く）知（知）里（里）考（考）し（し）ぐ（ぐ）。
し（し）も（も）其（其）名（名）と（と）就（就）て（て）辨（辨）へ（へ）ぐ（ぐ）と（と）或（或）地（地）の（の）人（人）は（は）此（此）書（書）
に（に）真（真）写（写）する（する）ところ（ところ）の（の）圖（圖）小（小）合（合）せ（せ）と（と）孫（孫）と（と）認（認）は（は）お（お）
く（く）原（原）圖（圖）と（と）北（北）郷（郷）子（子）明（明）が（が）畫（畫）き（き）し（し）と（と）し（し）ら（ら）な（な）り（り）然（然）る（る）よ（よ）
一原（原）圖（圖）と（と）北（北）郷（郷）子（子）明（明）が（が）畫（畫）き（き）し（し）と（と）し（し）ら（ら）な（な）り（り）然（然）る（る）よ（よ）
其（其）中（中）に（に）注（注）し（し）其（其）の（の）邊（邊）ら（ら）ざ（ざ）ら（ら）が（が）阿（阿）る（る）紙（紙）を（を）更（更）小（小）
こ（こ）を（を）質（質）正（正）し（し）社（社）友（友）小（小）乞（乞）て（て）改（改）写（写）せ（せ）り（り）其（其）の（の）歎（歎）識（識）
紙（紙）以（以）て（て）系（系）圖（圖）と（と）辨（辨）別（別）を（を）べ（べ）し（し）。

一 食料の草木去毒の法種々ありといへども。灰
 湯と塩味と紙以て第一と云ふ。何れ令小毒ある物
 といへども。灰湯にて能く燥て度く水紙換へ
 浸し或は流水に浸し置洗淨煎熟し塩味を以
 て調食すれば嘗て害ある事あり。但し灰湯は
 多難木の堅き木を焼く灰をよくと云ふ。松杉
 などを焼く灰は功為し。そは石小いへる製
 法を誤り草木の毒は中りする者あり。白米
 を挽り湯のごとく煮き粥小煮て塩り焼味

を以て雑へ度く啜る。或は世傳しその毒鮮を
 るも然なり。
 一 調食の法凡そ塩味醬油の類紙用ふ。圖
 の上小記をところ食べると云う。書する物
 も。うろちくは塩味を以て各條を水を書す
 るは煩らり。きと云ふ。味きたるもあり。
 一 菜菔芋胡蘿蔔苡苳蓮根甘藷菜葱などの
 類元より賦食の良品あり。こをらる。世人常
 知るところあるが故に。此書に載せ。又禽獸

魚鱉海原の類も食用に備ふべきものあり
ありきとを以て書とて草本のて紙とす
が故に載せば

一書中載する處の外なる草木の食ふべきもの
少くは他日考訂して續篇に載すべきあり

天保四年癸巳仲冬望

若狹侍醫 杉田豫立卿識



備荒草木圖題言

元禄八年乙亥初夏と至仲秋の頃まで度々淋雨
し寒令行きて五穀登らば奥州おほいし飢饉し諸
村の百姓妻子相離別は老弱を溝壑に轉び壯者
ハ四方に離散する事あるに至る山谷などの僻村ハ
人跡絶て民屋ハありなき空く狐狼の栖とちる
田園も曠野と變じたる處もありしと古老の物
語も傳聞多れを死を免きたる飢民何物も食
ひいらある術ありき飢を去のぎありん記し

置くる人もなつた。今小及て高向の可成を和
まざる者あり。然るに寶曆五年乙亥の冬。又元禄の
時のごとく。令行は淋雨稼穡傷り。五穀登らば。
飢饉におよぶ。此時他郷を流離し群來する民
ども。鶴形鳥面の老弱男女。道路に枕籍する形勢。
地獄餓鬼道の苦と云ふらんも。是より過ぐる所の
らば。そに我一閑を。那絶の儲畜倉庫に。諸吏の
命あまて。戸を巡見せし。免著く封内は在ると
ころの飢人を訪ふ。白粥を食ふ。久しく飢疲と

る者あり。おづ精湯を飲む。氣力を調へて後小。
毎日間粥を米を與へ給ひし。飢民恩澤に
歡喜力をほて。踴躍進んで山に冬り。深下里。木
葉草根を採ひ採て親密し。米に雜へて賦食の助
とせし由多。縁死流亡に患なく。百姓安堵あり。聖
る六年の春。お里時候も順度りて。耕作細芸を
励む。勅りる。秋の完至例の多し。里勝りて。免で
とき世よまんと。ちのへりなる。抑惡民の常情飽
た飢飢忘るる習あり。過りし年の困苦はいはれり

忘きて。語り出せる人も無く。況て記置て後述よ
告んとする者のきこえさほこそ悲しき。此後
り。又飢饉の事ありた。元禄安暦の時のごとく
あゝん事凶忍るゝが故。又寶曆の時。飢民の食し
て命を保ち。身又害無りつる草木を問質し。記
置て世に示し。一人も飢死の患ありし
めんと志し。山老に計を。野叟に問ひ。也。き野山
あつるをた。子弟に命して。掘て前栽し。移し植させ。
遠き堺より里々。その根葉を求集て。生写しける

間。小。回。國。江。利。郡。岩。谷。堂。村。ある。遠。藤。志。峯。此。舉。を
傳。聞。る。自。編。る。荒。歲。録。と。云。つ。る。書。を。贈。り。ま。す。こ。子
木。の。根。葉。數。品。を。饋。り。し。の。ご。と。き。助。來。小。と。里
了。荒。年。小。遭。て。糧。ふ。を。磨。き。本。百。餘。種。を。識。は。す
り。此。に。於。て。同。藩。の。友。北。郷。子。嶋。小。請。て。其。形。状。を
生。寫。し。簿。名。和。稱。或。考。載。せ。り。備。荒。草。木。圖。と。題。を。
他。日。時。を。ぼ。を。印。刻。し。て。民。間。に。示。置。む。事。を。欲。す。
ち。の。遺。漏。し。る。もの。ある。處。を。後。の。回。志。に。人。補
あ。ら。ば。豈。予。が。本。懐。の。こ。ち。ら。ん。や

明和八年辛卯中秋

陸奥一閑侍醫 建部由正清菴誌

備荒草木圖卷之上

目錄

- | | | | | | |
|-----|-------|----|-----|-------|----|
| 稀蒼 | あふもみ | 菊科 | 繁縷 | とこべ | 石竹 |
| 蒼朮 | をけら | 菊 | 茅 | ちがやめね | 禾 |
| 木通 | あけび | 木通 | 紅藍苗 | くまなる | 菊 |
| 葶藶 | ところ | 葶藶 | 苜蓿 | あさぎ | 竜胆 |
| 萱草 | とろれぐさ | 萱草 | 馬蘭 | とろん | 馬蘭 |
| 錦葵 | せふあふひ | 錦葵 | 山蓴菜 | とさび | 十字 |
| 剪刀股 | ちーぐり | 菊 | 水芥菜 | たごいこん | 十字 |

本草綱目

水朝顔 みづあさぐら **水鏡**

蒲 がま **手本**

澤瀉 おもだう

後庭花 こけいこう **花**

卷丹 まにゆま

馬齒莧 ばぢうけん

鼓子花 ひるがね **花**

卷耳 まきみみ **石竹**

川穀 がく **手本**

董菜 とうさい

野葡萄 のぶどう **葡萄**

山葱 さんそう

土園兒 どゑん

苜蓿 もくご

珍珠菜 しんじゆさい **櫻草**

鷄眼草 けげんそう **草**

藜 れい **藜科**

鰾蓬 びょうほう



莧 けん

敗醬 ばいじやう

黃獨 わうとく

橐吾 たうご

桔梗 ききやう

棣棠 たいたう

胡枝子 こしじ

金盞花 きんせんか

蒲公英 ぼんげん

蓮實 れんじつ

絲瓜 しきわ

本草綱目 目錄

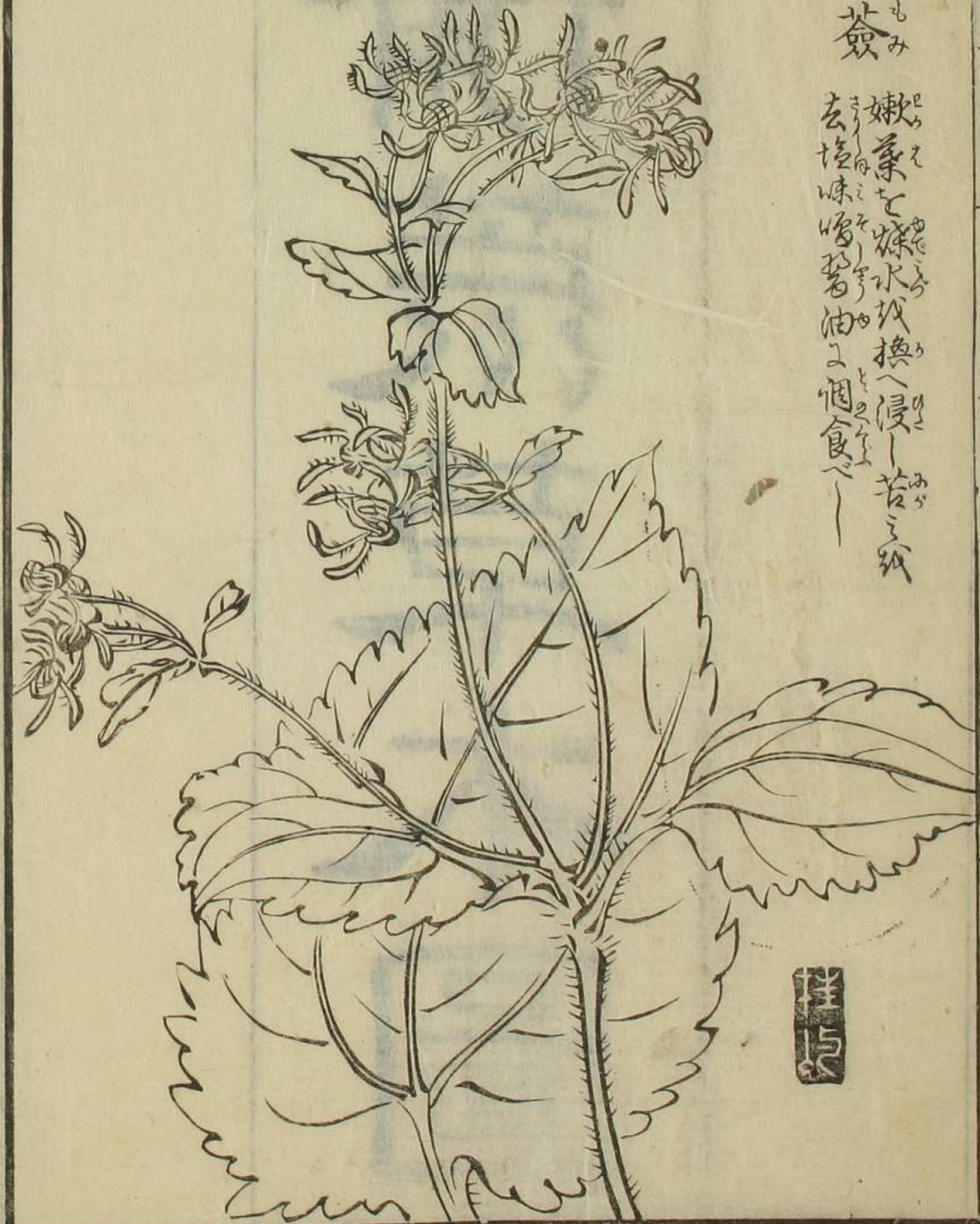
備荒草木圖



子壽

繁縷

葉を焙じて浸し
味増し酒食に
用ひ



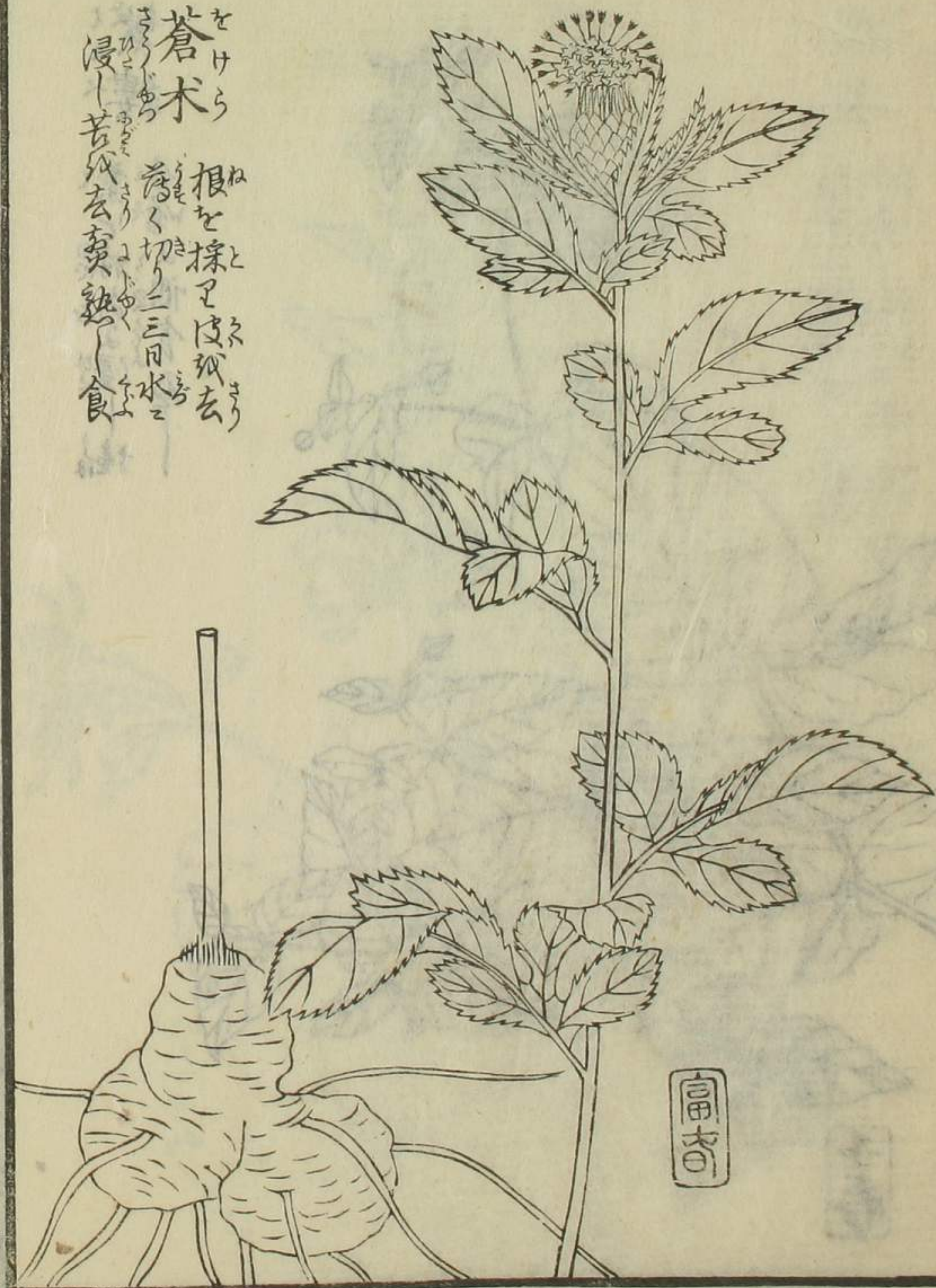
稀薺

嫩葉を焔水で換へ浸し
去塩味増し酒食に
用ひ

性温

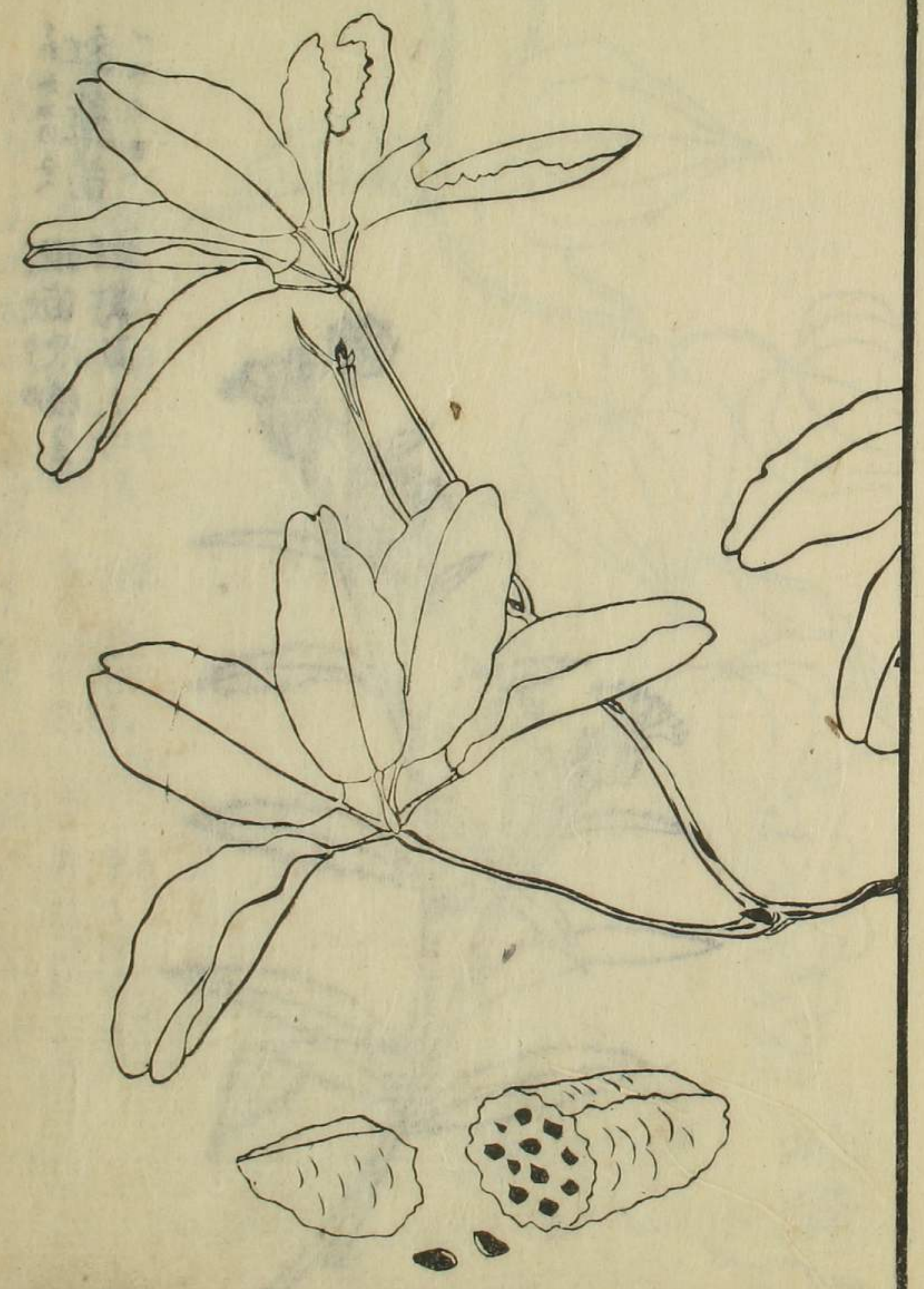


茅 つむぎ
嫩芽 あやめ
去餘蘆 あやめ
一

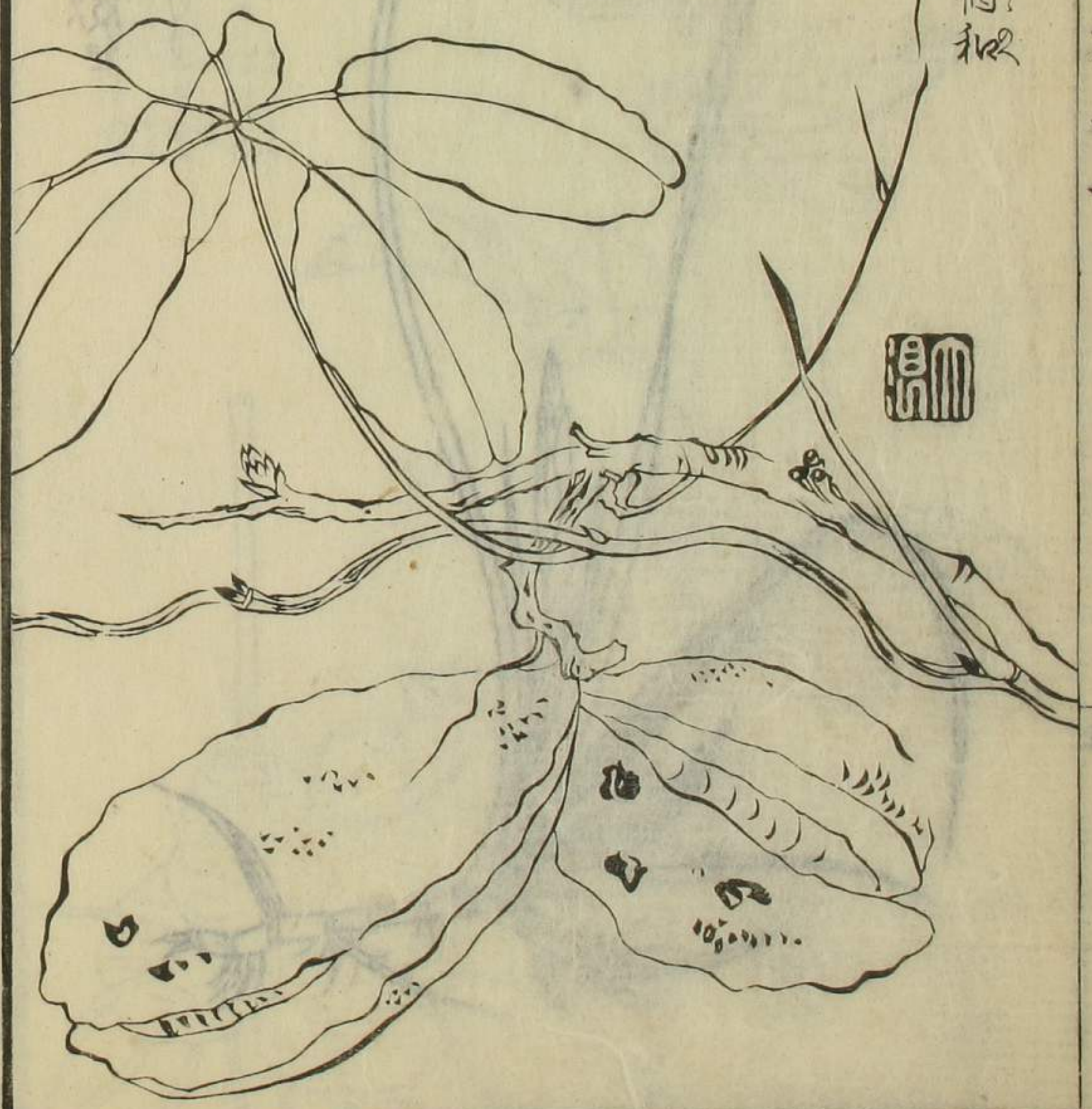


蒼朮 せきら
根を採り皮を去り
薄く切り二三日水に
浸し苦味を去り熟し食す

富奇



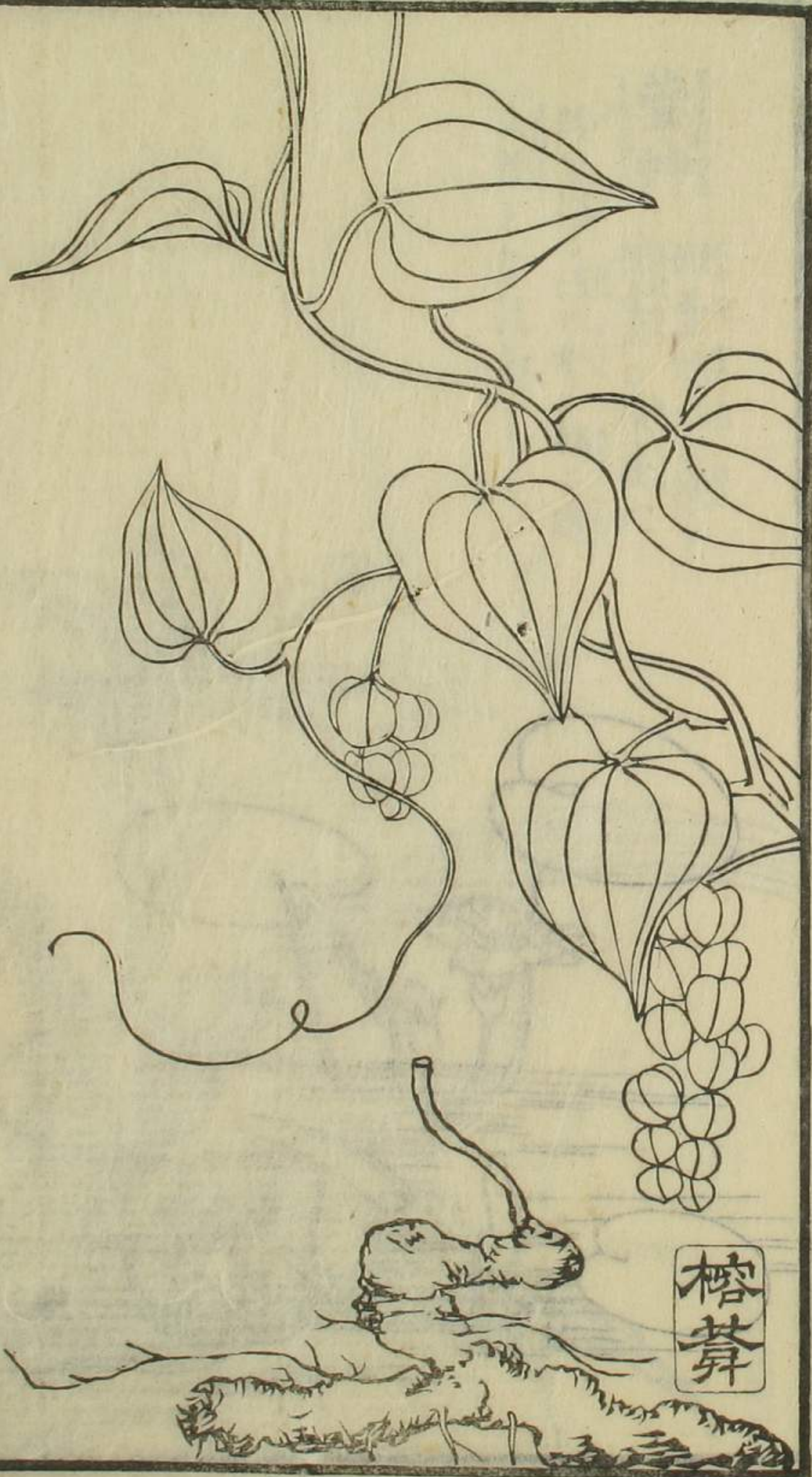
木通 あけび
 嫩芽 あけび
 食 あけび



紅藍苗
紅藍苗 嫩苗 灰湯 燉食



萹薺
根を換えて流す一夜浸し若くは去之又ハ
灰湯を燉食す熟しあは換へ浸すと二夜の後蒸して
食す又米煮あじふ合せ炊すも食す但虚人多く食す



榕薺



萱艸
嫩葉條水浸之
根麩丸
粉を俵る法の如く餅小造
又根となげ登



六



苜蓿菜
嫩苗を條
食之



馬蘭

葉如蘭花
根如蘭根
花如蘭花
根如蘭根

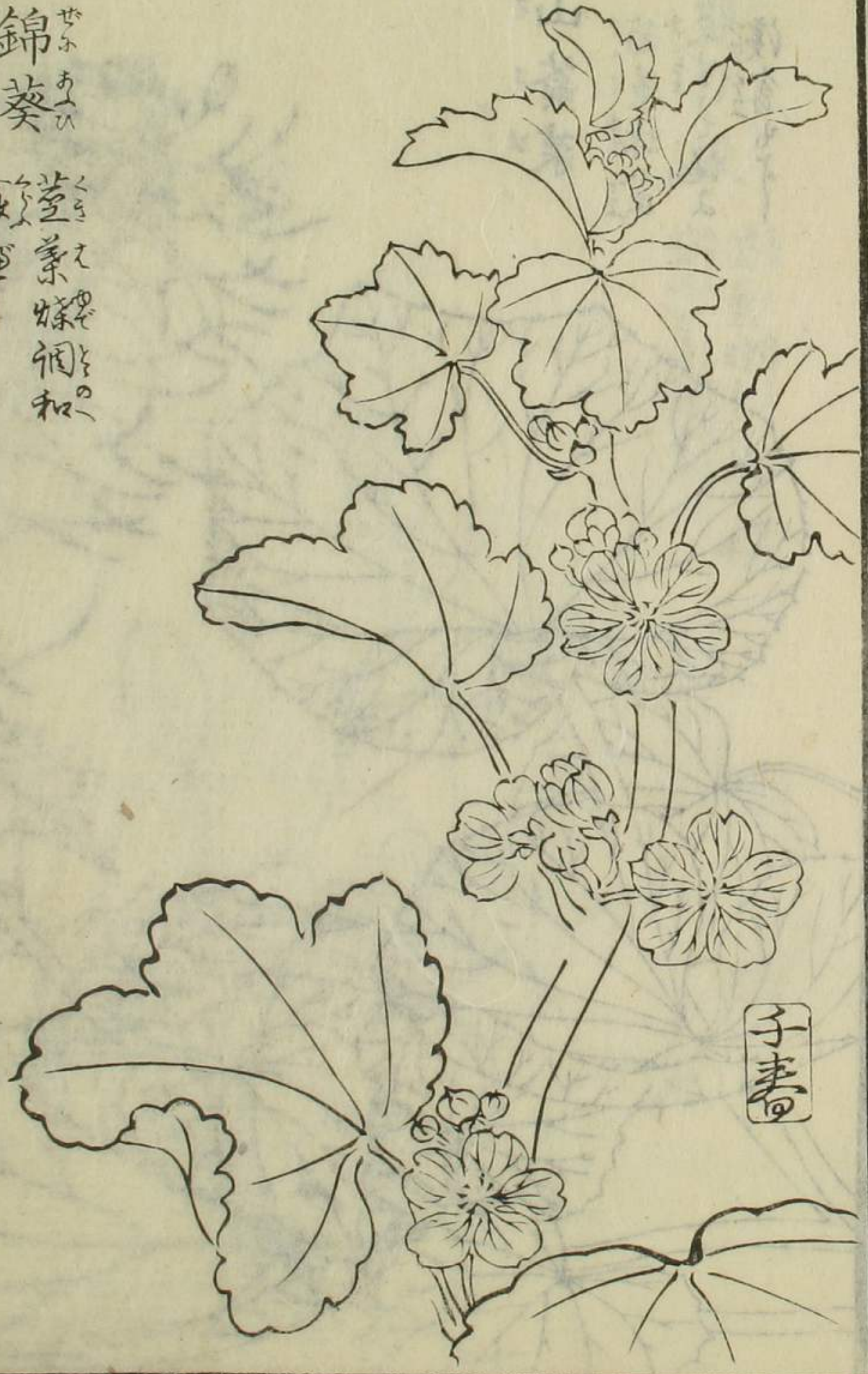


宣
神
...
...
...

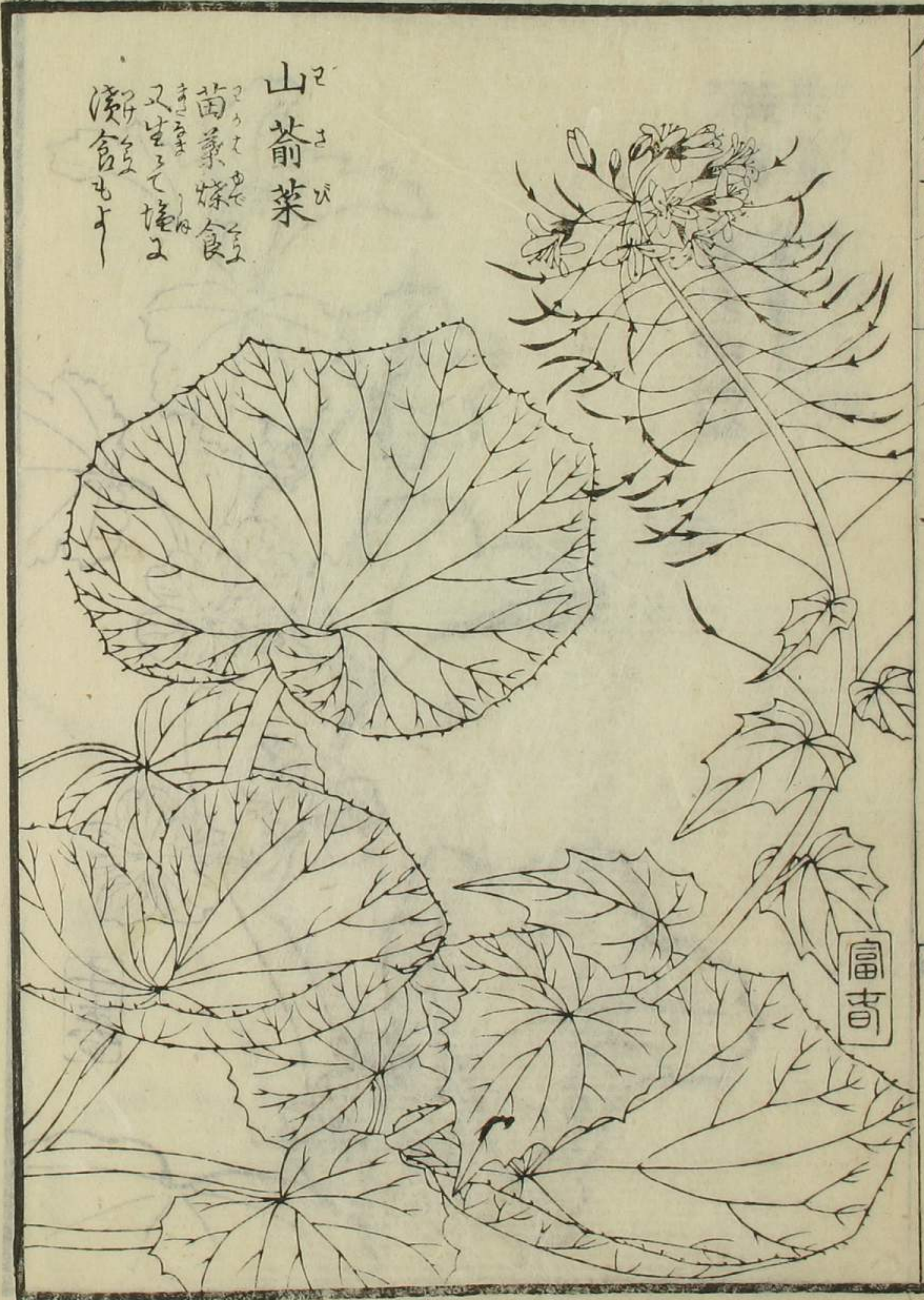
四
臣

錦葵

葉如芙蓉
花如芙蓉
根如芙蓉



子
春



山 蓴菜

苗葉嫩食
又生之極
淡食もす

剪 刀 股

苗葉嫩食
苦味を去
酒食もす



水芥菜

大いこん
嫩苗時より浸し練り
去塩味を調食す



水朝顔

菜類
塩味を調食す



榕菴

董菜 こまひきくさ
葉 たか 燻 たか 炙 たか 湯 たか 浸 たか
食 たか 宜 たか



榕菴

蒲 がま
軟 たか 筍 たか を 搦 たか り 燻 たか 炙 たか 湯 たか 浸 たか て
味 たか 宜 たか 食 たか 宜 たか





澤瀉

根を煮て
粥を食ふ
一

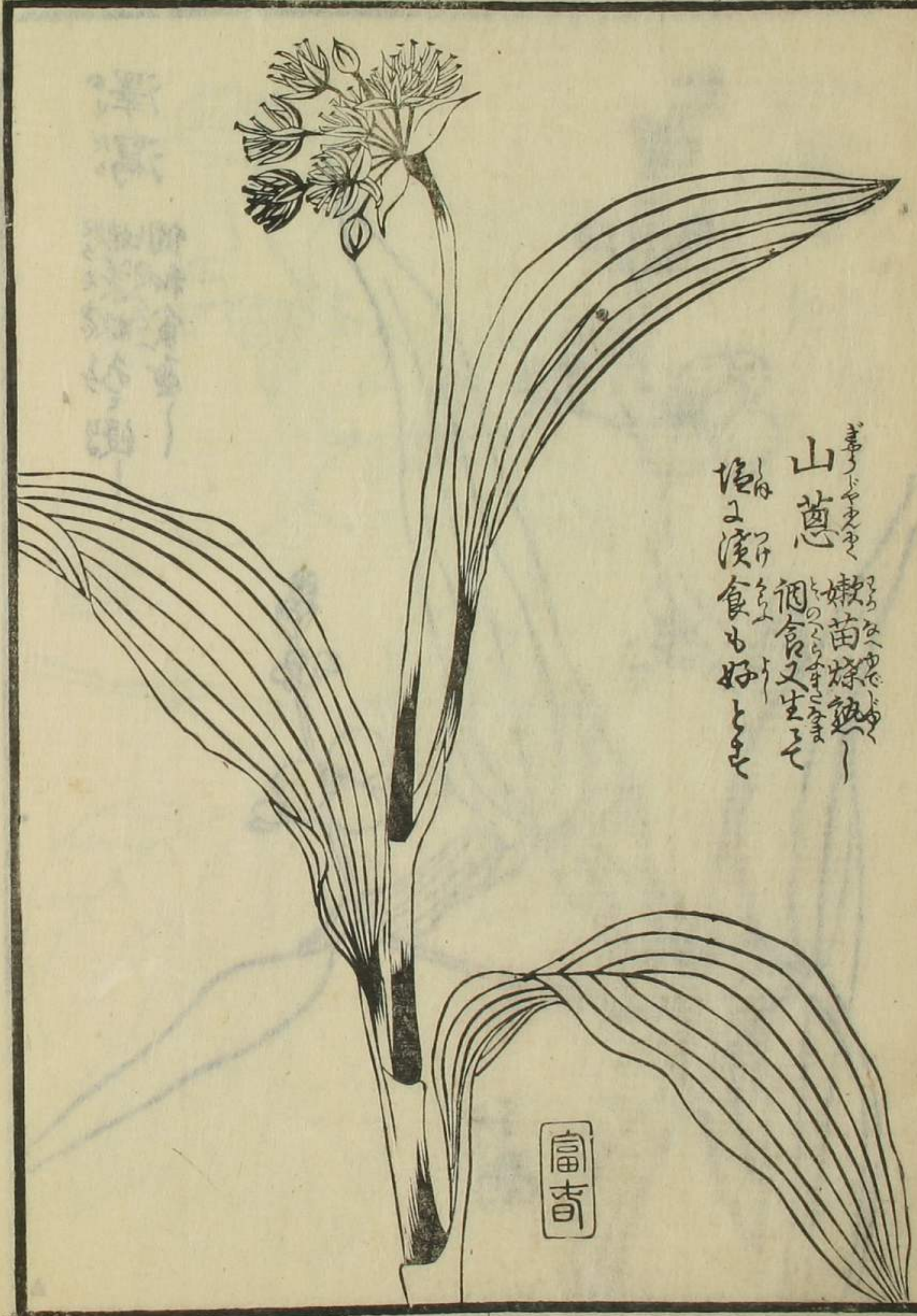
子春



野葡萄

実の熟したるを
食べ

子春



山蔥
嫩苗採熟
和食又生之
培之溪食も好とす

富奇



後庭花

苗葉採熟之浸和食
又脚花とす



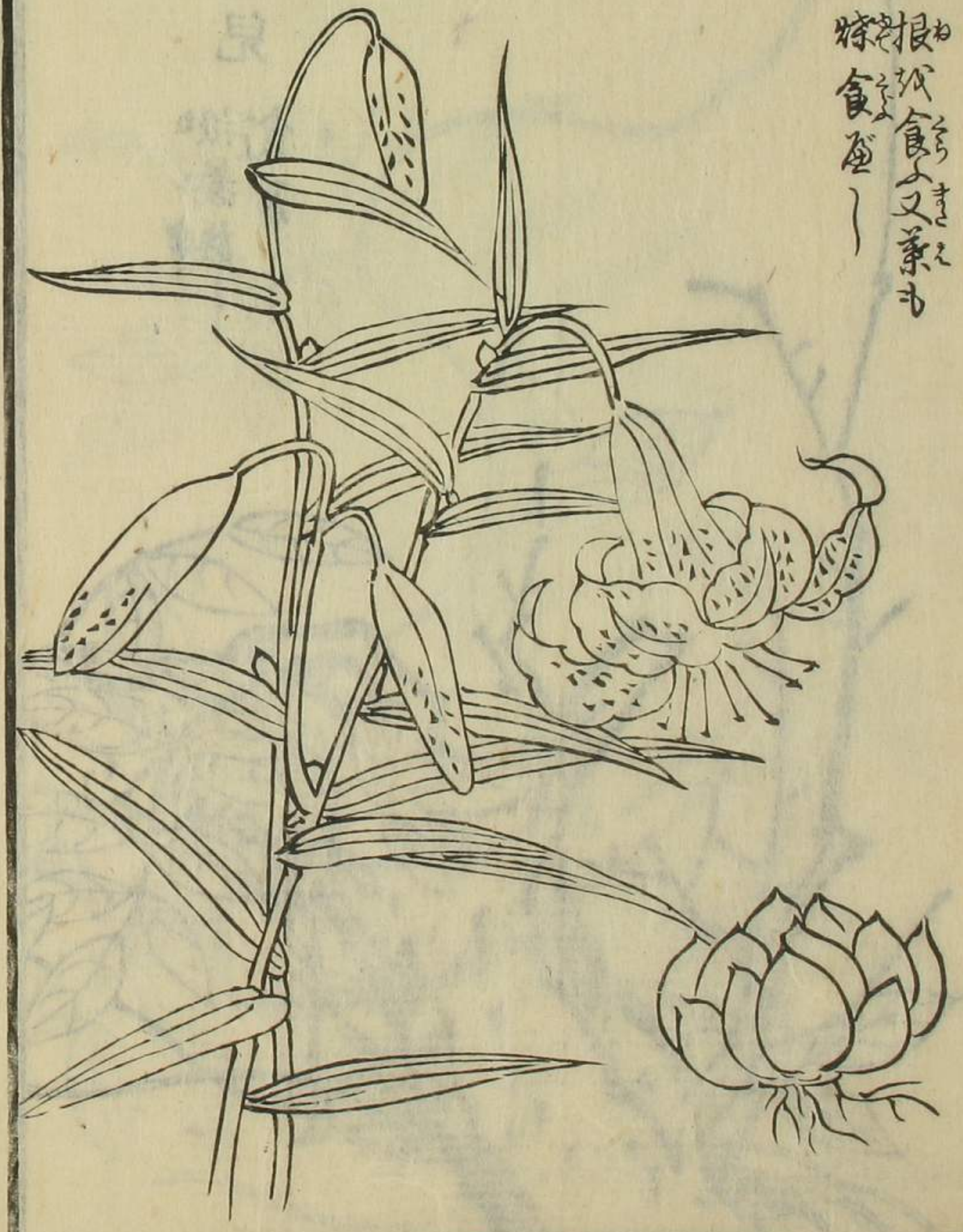
土^不園^上兒

根^木煮^小熱^帶
食^履 |



卷丹

根食之 又葉也



苘蒿

莖葉共之 燥熱 塩漬之 相食べ



馬齒莧 そごりひゆ
葉を煮て浸す
又蕨の粉と同く食す



榕菜

珍珠菜 とらのせ

葉を煮て浸す
又蕨の粉と同く食す



于菘



于春

鼓子花

根ハ根を和へて蒸し又ハ煮て食べし又皮を去りて
紙裏てあり浸し洗ひ麦末あど雜て粥とす
又磨く粉とす毎々造り蒸て食べし○葉ハ煉熟根と
去る但一日連て食べくべし

雞眼艸
米とあめを浸せば
又磨て粉とす
造る



卷耳 みみぢ
菜 え 燂 やく 食 く



富奇

藜 あざき
菜 え 燂 やく 食 く
乾 くわ 蓄 たく 食 く





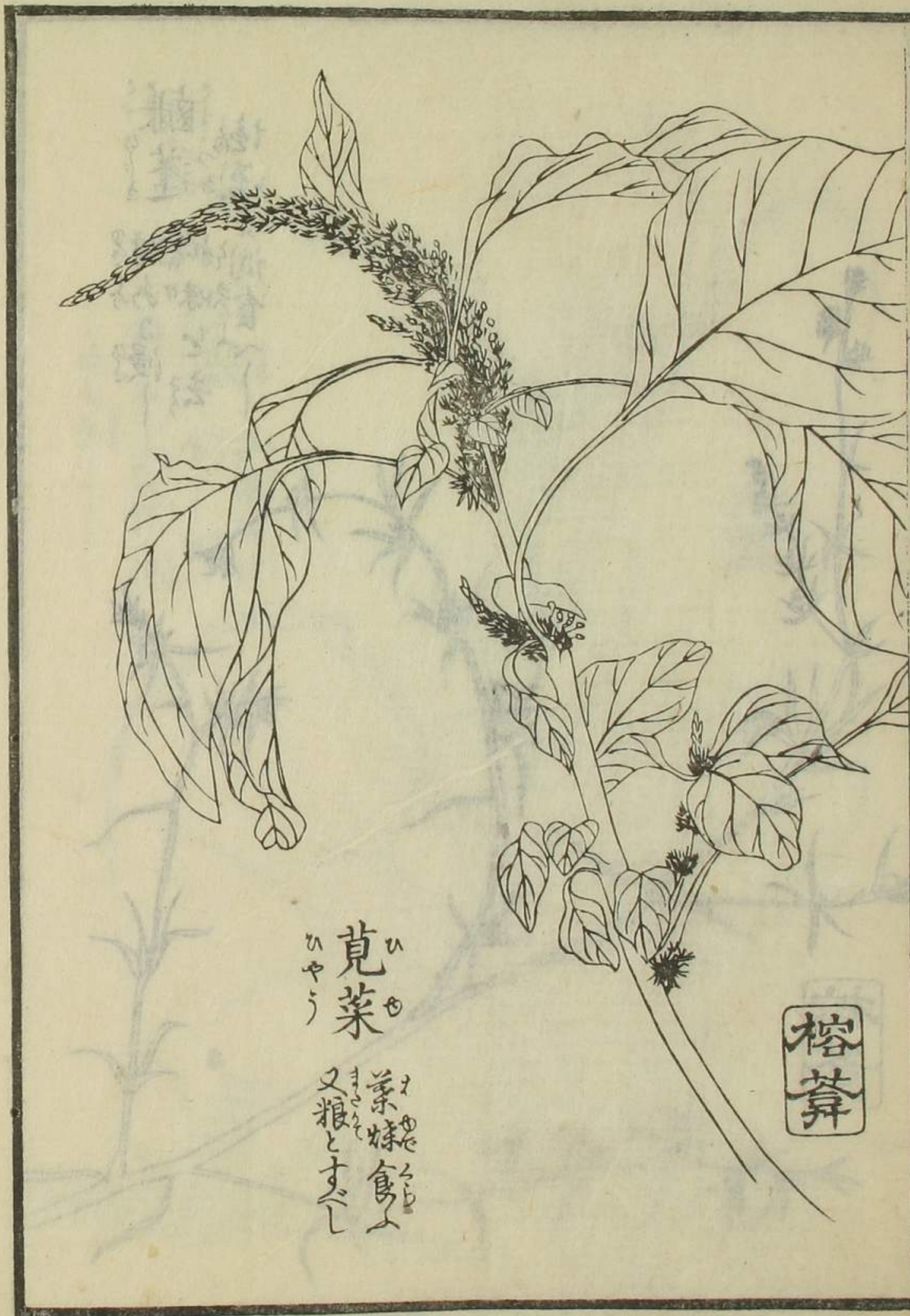
川穀 たまご 子搗碎炊
食之 或ハ
麵と 或ハ 粥食 或ハ 化
之 亦 亦 可

印



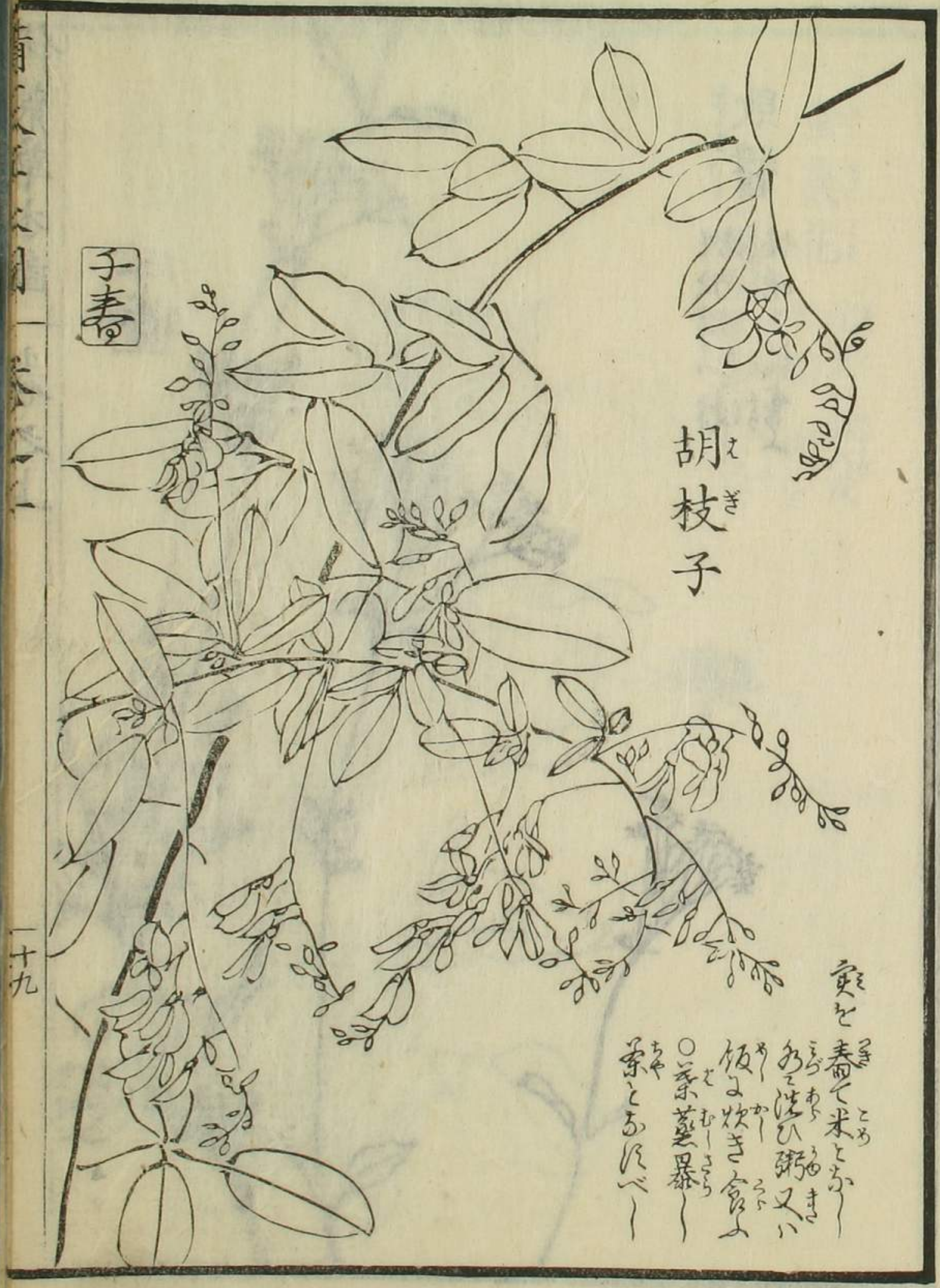
蘼蓬 味 鹹 味 去
又 酒 食 之

榕葍



榕菜

苜蓿
ひやう
菜餅食
又根とすし



胡枝子

子春

實を春て米とあ
らば餅又ハ
飯に炊き食ス
○菜蕨暴
菜とあはべ

子壽

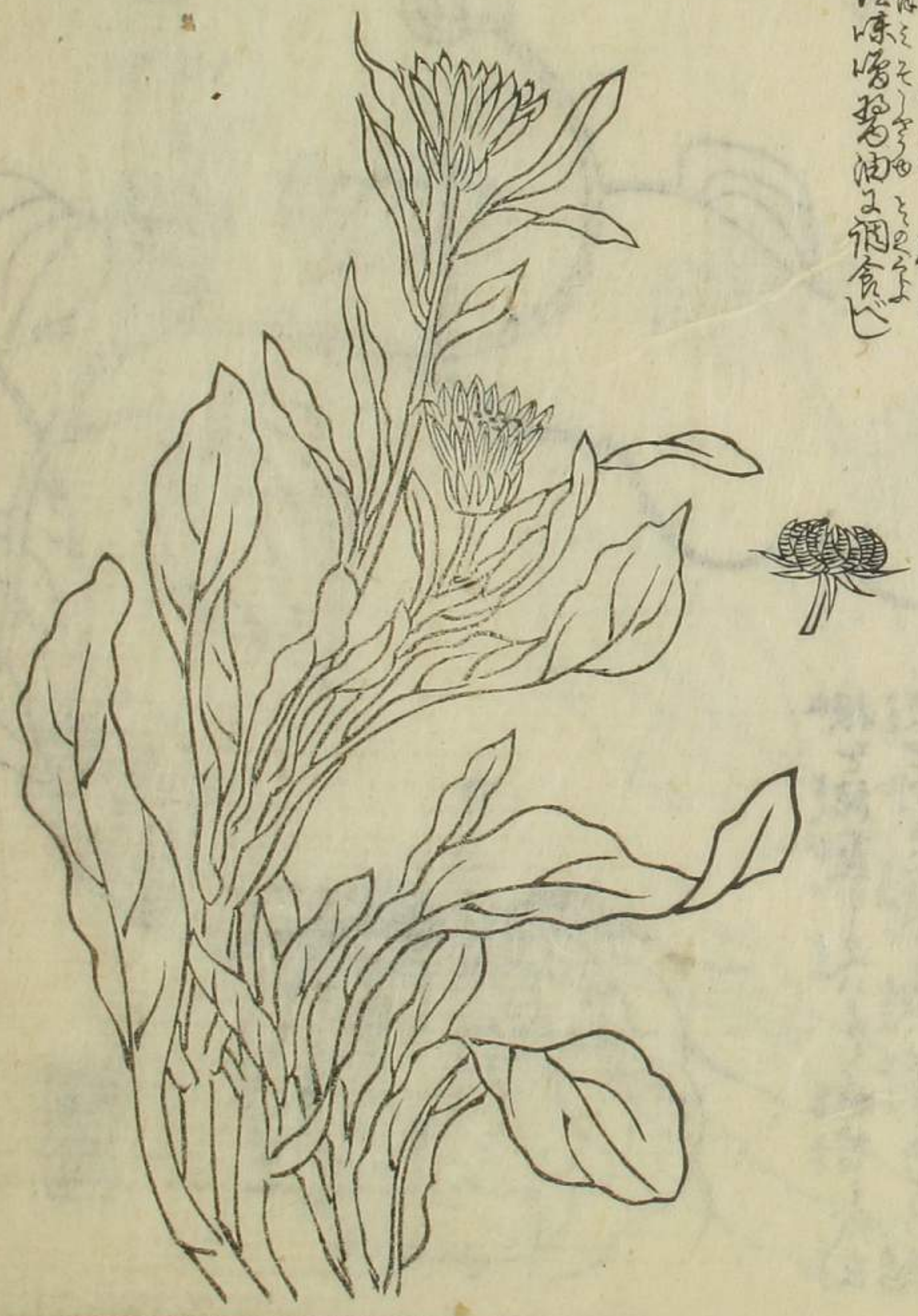
敗醬

嫩苗採之浸
地味子細食之

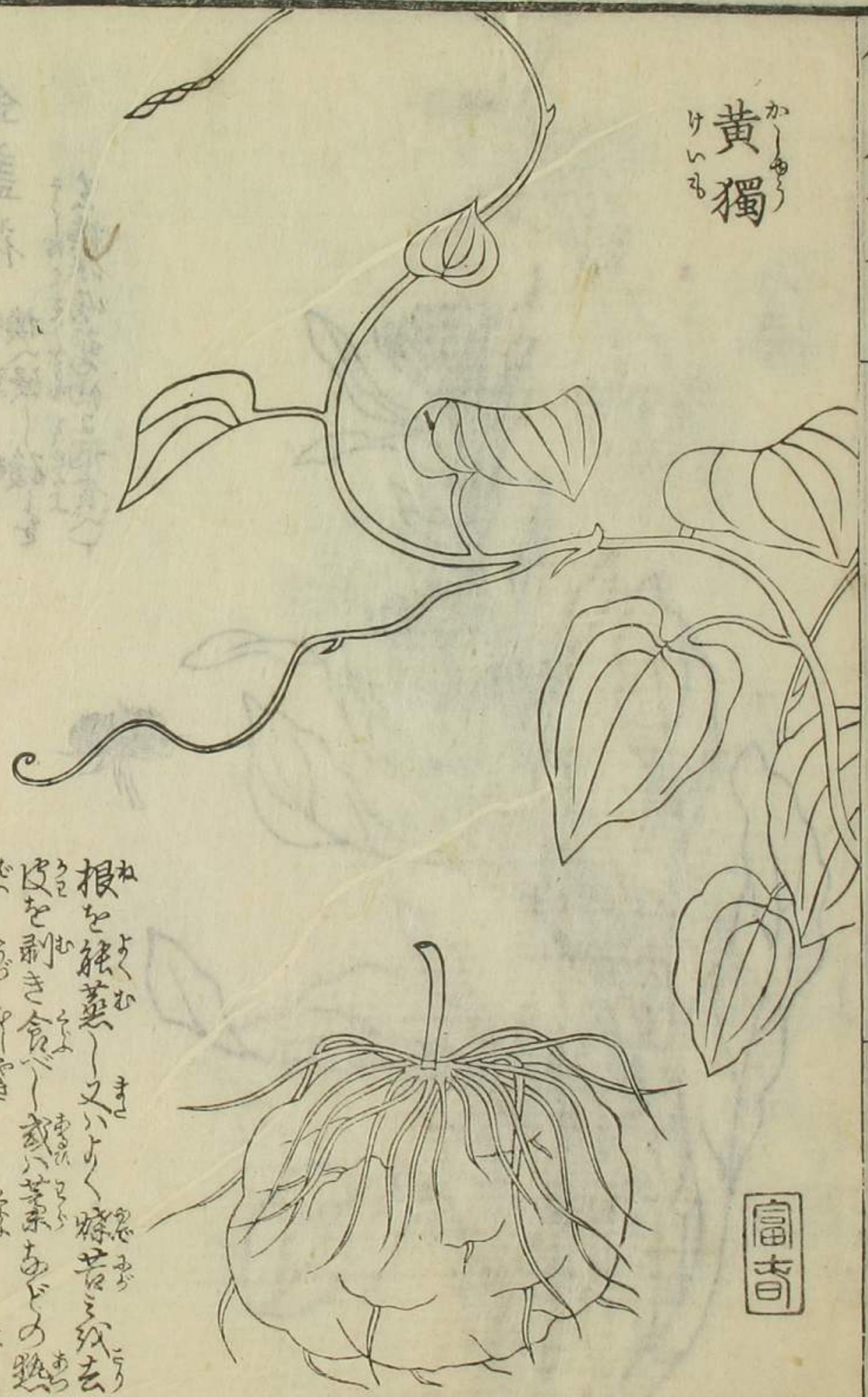


金盞花

苗葉乾燥
換入酒食之
玄陸味增香油酒食之



黄獨 かきもち
けいも



根を剥ぎ煮て食べ
皮を剥ぎ食べ
灰よけの蒸焼して食べ
根と同ド中より食べ

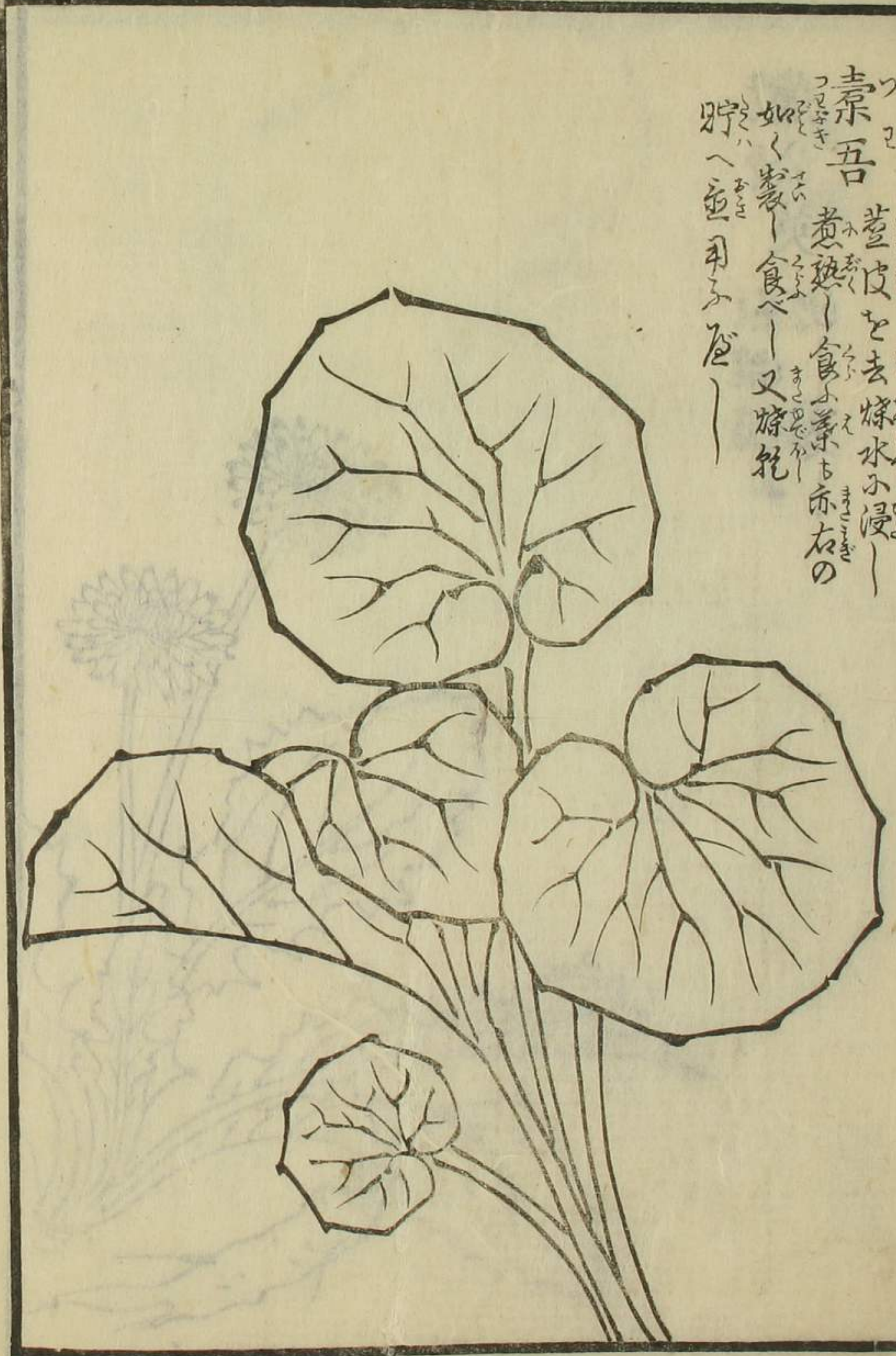
富奇

蒲公英

葉を煮て食ふ
根を煮て食ふ

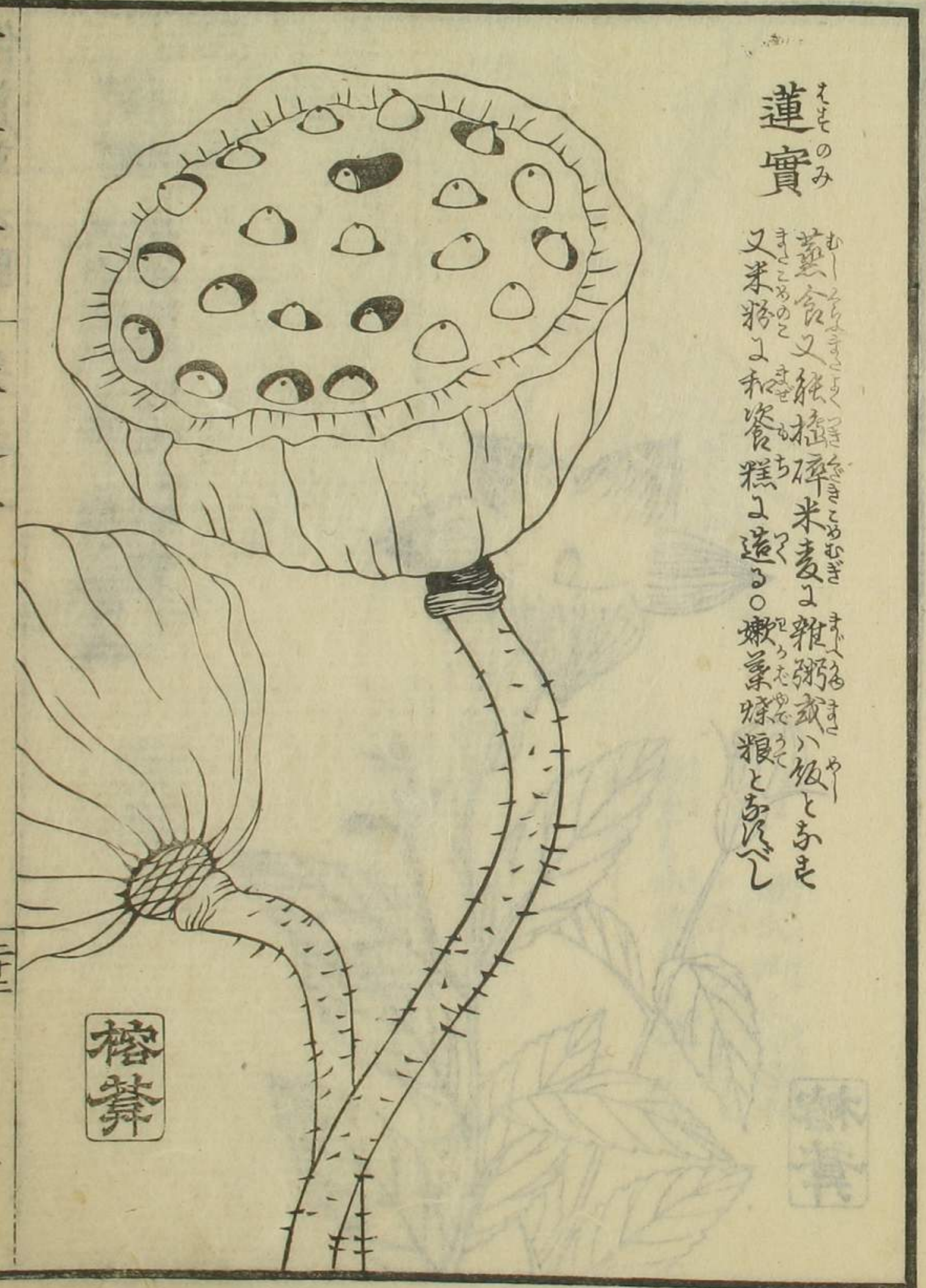


素吾 莖皮を去燻水に浸し
煮熱し食ふ葉も亦右の
如く製し食へし又燻乾
貯へて用ふ也



蓮實

蓮實 蓮の實也
又米粉と和蜜糕と遠る。嫩葉燻乾とあはし



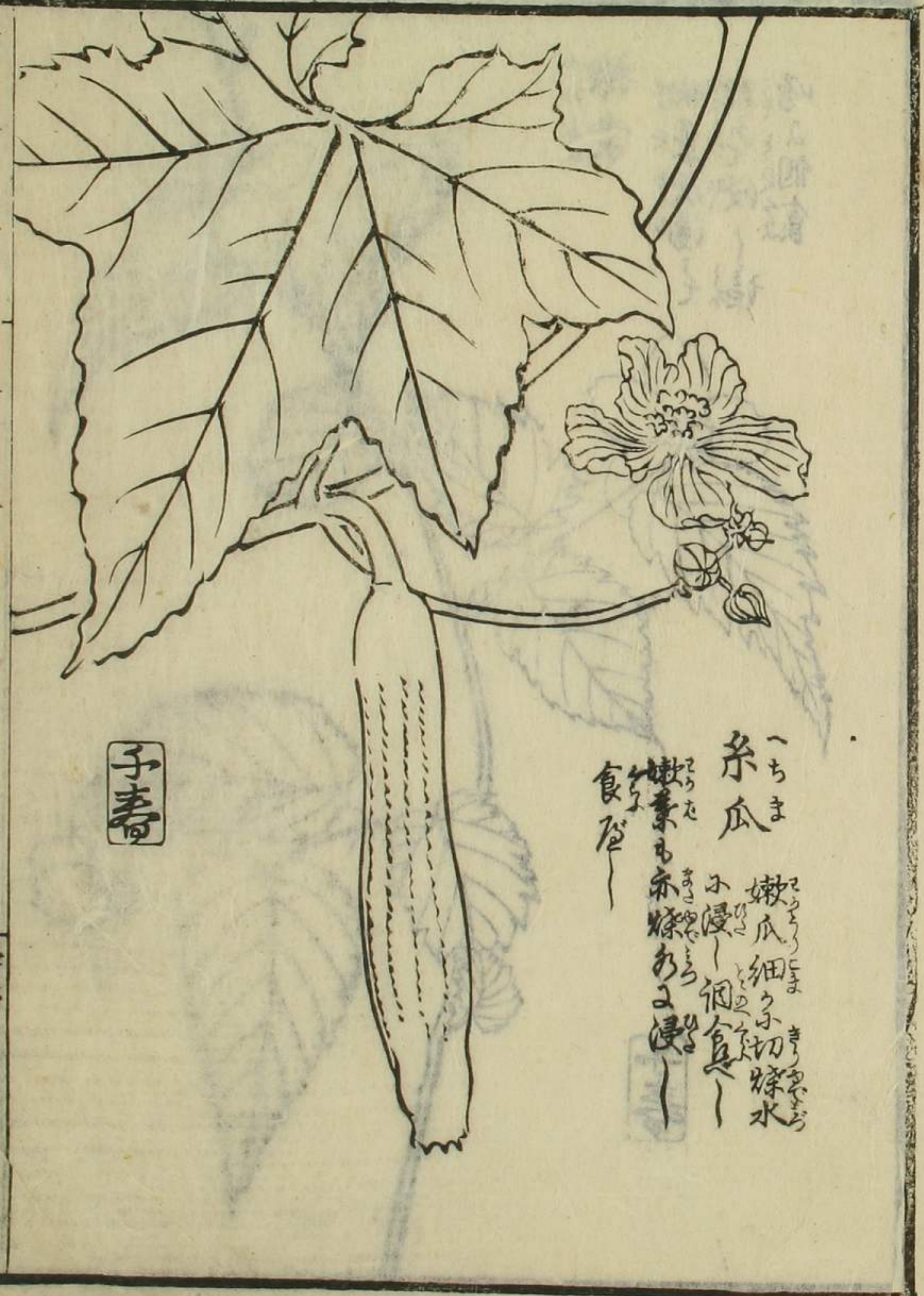
榕禁

桔梗

嫩苗水に浸し、皮を剥き、
苦味を去る。根を食す。



榕葺



へちま
系瓜
嫩瓜細く切、水に浸し、根を食す。

子壽

棣棠
中
嫩葉灰湯之
燉之
嚼之
潤食



子壽

